

「終末」の終わり、
「ルネッサンス」の始まり



同時代エッセイ

Grasshouse

テレビやネットの世界では、相変わらず暗澹たる情報ばかりが流れているように見える。あの颯爽と「チェンジ！」を謳った初の黒人大統領バラク・オバマは、テロリストと断定したなら世界のどこにいても裁判なしの逮捕を可能にするNDAA法（国防権限法）にサインして、アメリカを警察国家、ファシズム国家にしてしまった。ドルもユーロも、もはや先がない。日本も借金漬け。世界金融はさらなる恐慌へ向かうという。

それでも、注意深くメディアを見ていると、未来に希望を持たせるような明るいヴィジョンが、波間に浮遊するイルカの群れのように、生き生きとした姿態を現し始めている。

—つい先日、いま世界中を席卷しているといって過言でないドキュメンタリー映画『THRIVE』を見た。この作品は、P & G（プロクター&ギャンブル社）の御曹司フォスター・ギャンブル氏が制作したもので、エネルギー論から、金融、農業、食糧、宇宙論、メディア、シンボリズムまでを含む二時間ほどの大がかりな動画である。一説によると、かのオキュパイ・ウォールストリート市民運動のバイブルでもあるらしい。

先鋭的な物理学者ナシム・ハーメインから、独立系メディアの女闘士「デモクラシー・ナウ」のエイミー・グッドマン、奇怪な陰謀説を称えるデーヴィット・アイクまで、幅広い分野の論客が登場する。ジオデシック・ドーム発明者で建築家のバックミンスター・フラワーや、モルガン財閥によって隠蔽された天才科学者ニコラ・テスラの業績、ジキル島における米連銀F R Bの談合もどきの怪しげな出自にまで言及する。一見、途方もなくかけ離れたこれらの情報群は、批判的に分析された後、まもなく起こるであろう金融システム崩壊以降の未来に向けて、新たな希望的ヴィジョンを結ぶのである。

ギャンブル氏は問う。これほど文明の発展した地球に、どのような理由でいまだに貧困や飢餓や戦争がはびこっているのかと。そして、答える。それは、地球のエネルギー循環（食・貨幣・富）が、独占的な金融支配と、石油・原子力系企業によって、ねじ曲げられているからだ。

もっとも本作品については、世界市民の側に立つように見せかけた、グローバル・エリート側の意図的な情報操作だとの指摘もある。いつものことである。われわれは、そこからニュートラルな有効情報だけを拾えばよい。

下世話な興味からいえば、まさに企業ピラミッドの頂点ともいえるP & Gの御曹司が、多国籍企業支配やグローバリズムの真相を暴露するという、陰謀論まがいの切り口で記録映画を制作したというあたりに、世間の注目が集まっているらしい。

■「未来型コミュニティ」の模索とフリー・エネルギー

『THRIVE』を見ているうちに、私はこの最先端の世界観、「循環型世界モデル」と、「新しき村」とが、底流のところでは共通のものを持っていると感じた。むろん表面的には、まったく

似ているところはないのだが、深層のところでは同調する要素が多い。ある意味では、「村」はこの作品で示されている「未来型コミュニティ」の先取りともいえるのだ。

ここで提案されているのは、権力を否定し、個を重視し、上下関係や命令系統はなく、エネルギーや食糧は地産地消という価値観である。ここまではよくあるエコロジカルな社会批評であるが、制作者のギャンプル氏が抱えているのは、無限供給エネルギーを背景とした、「循環型社会」実現への強い確信と、具体的な方法論である。

貧困や飢餓がいまだに地球から根絶できないのは、特定企業グループによるエネルギーの独占、いや新エネルギーの隠蔽が行われているからだという。広い意味でのフリー・エネルギーは、実験の成功不成功のレベルはすでに過ぎて、課題はもはや社会的な汎用性だけであるという。ここに至るまでに、かなりの数の発明家が暗殺されたり、投獄・脅迫されてきた事実も、記録画像で暴露されている。

ここでひとつの魅力的なキー・シンボルとして登場するのが、空間から直接エネルギーを取り出す「トーラス」という立体モデルだ。（ある方向からエネルギーが入力し、一定の構造を保ちつつ、別の方向からエネルギーが出力される時、そこに保たれた渦巻や螺旋の構造は、「トーラス」となるらしい。ややこしいトポロジー的な話は省く）最も単純化するなら、これは太いドーナツのような三次元モデルで、映画全編のライトモチーフとして、美しいホログラフィが挿絵のように反復される。

じつは素粒子から、人体や、台風、生命、大気、地球の電磁場、銀河の渦巻構造まで、一貫して同じようなドーナツ型のエネルギー・パターンが見られるという。この宇宙は、極微から極大に至るまで、相似形的な「トーラス」パターンの巨大生成工場なのだそうです。この謎のドーナツは、「別次元とこの世を結んでいる秘密の通路」なのかも知れない。となると、エネルギー呼び出しの一種の物理学的な魔法陣にすら思えてくる。いささか古いが、「エロイムエッサム！

我は求め訴えたり」というやつである。出てくるのは悪魔でもメフィストでもなく、人類を幸せに、豊かにしてくれるエネルギーだ。このメカニズムを語ることは私の能力を超えているが、どうやら形態そのものが、エネルギー産出に関係があるらしい。あるいはその逆か――。

しかもこの不可思議な構造は、古代エジプトの遺跡や、カバラの生命の木、北京の紫禁城や、易経にも同じ暗示的象徴が隠されているというから面白い。64という数字がキーとして頻繁に出てきており、これがトーラスの潜在骨格ともいえるベクトル並行体の各頂点の合計数とのこと。DNAの暗号であるコドンの組合せも64、易の卦も64。つまりこれらのシンボルが洋の東西を問わず散見されるのは、決して偶然ではない――とまでいわれると、話はなにやらオカルトじみってくる。

■「ピラミッド」から「ドーナツ」へ。それを阻むのは「サナダムシ経済」

話がやや抽象的になってきた。何しろこのプラトンの美しいイメージにあふれた、芸術的とするに足る長編動画の制作者が、トポロジー的な象徴を、ファシズムを抑止し、民主主義を守り、貧困や環境破壊を解決するための社会運動の起爆剤にしようとしているのだから仕方がない。タ

イトルの『THRIVE』とは「繁栄」のことだ。

八年の歳月をかけたというこの映画が、極めて戦略的だと思われるのは、この一般にはあまりなじみのない幾何学モデルを、時代の象徴的ヴィジョン、市民の「自由と解放」の武器とすることに、どうやら成功しているらしいことである。なにしろわれわれ現代人は、この暗い閉塞状況を、何とかして突破したいのであるから。

私の理解の範囲内で、この作品の最大のポイントをいうならば、世界のさまざまなエネルギーの流れは、今日の政府や企業のような硬直した三角形の「ピラミッド型」ではなく、本来は、無限に巡り続ける丸みを帯びたドーナツ型、「トーラス」だという主張であろう。

つまり、地球の健全なエネルギー循環が、ねじ曲げられているのだ。

ドーナツの中心には、醜い巨怪なサナダムシ（特権的金融グループ）が黒ぐろと巻きついて寄生し、養分を吸い取っているのだという。

本来、「トーラス」においては、中心から放射されたエネルギーは、外部から捲れ込み内部へ、内部から捲れ込み外部へと、まるでイスラムのスーフィーの旋回ダンスのように優美に舞踏し続け、それは決して、硬直したり、固着したり、収束したりすることがない。その中心は、「真空」「空」とでもいうような、創造的な静謐さで自足している。しかもこのわれわれの宇宙全体が、大小さまざまなドーナツ型エネルギー圏の波紋の重なりによって、無限の「渦」の集合のように構成されているという。そこに〈サナダムシ〉はいない。

私はこの「トーラス」の立体模型から、「バイオスフィア」という別の言葉を連想した。「バイオスフィア」とは、多種多様な生き物が共生しているみずみずしい生物圏のことだ。それらは半分開かれていながら、半分閉じられた構造にある。森の中の湖をイメージすればよい。温室や、最近流行りのビオトープ、バイオ・ドーム、エコ・ヴィレッジも、同様の小さな生命宇宙である。これは人間のコミュニティでいえば、経済的なグローバリズムや、専制国家の横暴から守られた、理想的な独立自存の「村」「桃源郷」のようなものかも知れない。老子のいう「小国寡民」である。これは「新しき村」にも通じる。

そして、『THRIVE』が一貫して主張しているイメージは、世界全体を、がちがちの「ピラミッド型監獄」にすることへのはっきりとした拒否であり、代わりに提出されている新たな世界像とは、人間の生命圏としての無数に相互作用しあうドーナツ群、「トーラス」群、大小さまざまな光の渦の波紋がゆらめく、ハーモニーに満ちたゆるやかな銀河宇宙なのである。

この世界像においては、ひとつの頂点に向かって、エネルギーも、金融も、食物も、情報も、一元管理される独裁型のピラミッド的社会構造とは違って、弱者や病者にもエネルギー（食・経済・価値）が満遍なくゆき渡る。

強力な個人や、一パーセント以下の財閥（サナダムシ）によって、富や財貨が退蔵・蓄積されることはなく、よどみなく無限に供給され、変換され、滋養ある血液のように循環し続けるのである。エネルギーも生命力も、中心の創造的な「空」「ゼロ」ゾーンから発生し、渦を巻きつつ、流動的な曲線を広げて、巡りに巡り、さまざまな生物の多様性を、生き生きと開花させる。そ

の開花の磁場は、新たなるセンター、自己実現の小中心となる。そしてその「花」は、外界のエッセンスをまるごと反映しているのである。（これはまさしく『華嚴経』の宇宙観だ）

そもそもが自然環境とは、そのように作られており、現在の独占型のピラミッド型統治形体は、一部の金融資本家が自分たちの王朝存続のために作った、人工的なフィクションだというわけである。

Winner takes all! なるほど。しかし、頂点への集中は、結局のところ、全体の涸渇と硬直を招き、富士山の裾野からの自らの死滅を意味するだけであろう。

■「アメリカ型大規模集約農業」への拒否権発動

例えば、このドキュメンタリー映画に、一人のインド人女性活動家が登場する。彼女は、巨大なアグリビジネス企業（モンサント、カーギル、デュポン）が、遺伝子操作作物（GMO）や、一代限りの断絶種（F1）を、利潤追求と市場支配のための圧倒的な武器としてばらまいている現状を、次のように批判する。

「穀物や野菜などの種子に、特定企業が遺伝子操作を加え、生命を特許化し、知的財産化することは狂っている。農家の種子の保存を禁止して、それが発覚した場合、窃盗として農民を犯罪者にするような法律を、許すべきではない」

記憶で書いているので正確な引用ではない。要するに、自然の生産物に、工業製品のような「特許制度」を容認するなということである。その通りだろう。もし特許云々をいうならば、大自然や神や地球にこそ、最初の特許権がある。アグリビジネスがそんな馬鹿げた詐欺を実行したいのならば、まず地球・自然そのものに対して、（数十倍もの莫大な）特許料を払うべきだ。そしてその多額の金を、地球環境保護や、貧困地域に廻すべきである。

カーギルや、モンサント、デュポンのおかげで、アメリカの小規模農家は壊滅状態にある。かつてのテレビドラマでおなじみの家族経営の農場・牧場は、皆、ヘリコプターで農薬を空中散布するような、大規模農法に吸収されてしまったのだ。いずれは家庭菜園すらも「犯罪」にされかねない流れが出来つつある。たかが特定企業によるこんな悪質な洗脳に、世界中が騙されてはいけない。

特にアメリカの歴史よりも、はるかに長く農耕民族として生きてきた日本人は、激しく違和を表明すべきであろう。「投資対効果」の論理は、所詮はそれだけの金銭的な結果論を出ないゲームの論理に過ぎず、人間全体のモラルでも世界観でも哲学でもない。そして、ここで今更いうまでもないことであるが、武者小路実篤という思想家・文学者は、一貫してこの手の利益効率主義的発想に批判的であったことも、改めてつけ加えておきたい。

もちろん、この企業エゴの発想と、T P Pが直結しているのは明らかである。

T P Pを推進したがっているのは、アメリカ政府ではなく、アメリカという大看板を隠れ蓑にしている〈サナダムシ〉的な多国籍企業（金融・保険・化学・医薬・食糧）である。

ロビイストの接触を受けていない議員は、T P Pをロクに知らないか、関心もないというのだ。

狙っている利益規模としては、日本の医療保険や、郵貯・かんぽの強奪が主な狙いだろうが、もしTPPが導入されれば、日本的な小規模農業も壊滅するだろう。そしてわれわれの食卓には、むりやり遺伝子操作ダイズで作ったいかにも不味そうな豆腐や納豆が並び、農家は毎年のように外資系の種子企業から、せわしなく種を強制的に購入させられるハメになる。

モンサントの遺伝子組み換えトウモロコシを食わされている現在のアルゼンチンのように、ますます奇形児が増え、精子も卵子も衰弱することだろう。そしてときおり、国税庁の抜き打ち査察のように「種を不法に隠し持っていないかどうか」を捜る査察官が入ることになる。これはまったく馬鹿げたブラックジョークだ。自然観そのものが犯罪的である。これを許せば、自ら農作物を生産することなく、国から国へと伸び縮みしながらその土地の養分を吸い尽くしている〈サナダムシ〉を、ますます肥え太らせることになる。

こういった問題は、単なる農家の経営問題ではないし、また日本人の食と健康に留まる問題でもない。それは二〇〇〇年間、縄文弥生以来培ってきた、われわれの農耕稲作文化の自然観の根こそぎの破壊となるはずだ。

■「新しき村」「バイオスフィア」「トーラス」

昨年夏、『新しき村』にはじめて一泊したとき、どこか空気が違っていることを感じた。それは懐かしさと落ち着きの感覚であったが、何かそれ以上のものがあった。

「村外会員の家」に宿泊させていただいたが、夜おそくまでしきりに啼きしきる精力的な蝉たちの声に驚いた。何しろ東京では七月末まで、まったく蝉は啼かなかったのである。私は日本の蝉は死に絶えたと本気で思ったほどである。毎年、あれほど鬱陶しいと思っていたアブラゼミであるが、子供の頃の夏休みの思い出と結びつき、貴重な風物詩であることを、いまさらのように体感した。あのジリジリと煮え立つような声の底力は、日本の夏の生命力そのものなのであった。

その時感じた不安の原因とは、むろん、三月から始まった東京電力の福島第一原発騒動だ。「関東は人の住めない廃土になる」と識者は煽った。「村」の緑と土は、そのような底のない不安をすみやかに吸収してくれた。

蚊取り線香を消して、茶畑の中を夜の散歩に出ると、頭上に星空が見え、闇の奥に、ほそぼそと灯が見えた。それは、私の育った高度経済成長期以前の懐かしい夜なのであり、土の湿り気と、夜の大気と、木の葉の露とが、柔らかく融け合う田舎の素朴な夜なのであった。一晚過ごして朝を迎えると、その懐かしさの感覚は、昭和への郷愁や、田園風景への懐古といったものよりも、より深い次元にあることに気がついた。

たとえば、朝食を食べる。その野菜や米は、すぐそこの田畑で収穫されたものだ。水を飲む。それは井戸で汲み上げられた冷たい地下水だ。そして電気までもが、少し歩けば手でふれられる緑鮮やかな茶畑の脇で「光合成」されており、コンビニだの、東電だのといった中間業者が介在しない形で、住民に供給される。

一方、都市生活者は、コンビニやスーパーを通して、食物や日用雑貨を入手する。そこには、流通というものがかわり、退屈きわまりないコマーシャルを見せられ、訳も分からず新製品を衝動買いさせられる。そこには情報操作と、中間搾取と、コスト削減がある。

しかし「村」という空間は、ひとつの大きな身体のようなまとまりを持ち、血液や、リンパ液のように、食物やエネルギーが内部循環している。地産地消をいい、有機農法をいうが、この心の落ち着きこそが、われわれが潜在的に求めているものではないだろうか。

『新しき村』という特異な空間は、ひとつのトーン、他にはない波長を奏でているマイクロコスモスであると感じた。

じつは『THRIVE』を見ながら思ったのは、この有機的な調和の気配であった。

外界の波長と内面の波長が「交感」することは、思っている以上に重要なことかも知れない。それは「半開放系・半閉鎖系」のまとまりのある有機的ゾーン、小宇宙であり、調和的なバイオスフィア（生命圏）、バイオドームの中に棲息しているようなものだ。

もともと都市化や、車社会以前における人間の環境世界とは、本来は、ひとまわり、ふたまわり拡大した身体の延長のように、親密だったはずだ。たとえば、ヨーロッパにおける〇〇ブルグ、〇〇ベルグなどの中世都市は、そのような生活空間であろう。その中心には、異次元と通じる教会の尖塔が、すっきりと輝いていた。まさに「トーラス」の渦巻きである。

「故郷」「ふるさと」という言葉で語られる環境世界は、蟬や、カブトムシや、フナや、神社や、寺の境内など、さまざまな象徴を与えてくれる。いまの子供達が、そんな象徴と出会えるのは、ゲーム機の暗いディスプレイの中だけだ。「〇〇君の夏休み」などというゲームを部屋の片隅でやっている少年を見ることほど、うら悲しい光景があるだろうか。

考えてみれば、「村」というものは、すべて創造的な渦巻であり、「トーラス」なのかも知れない。「町」は「都市」の構成要素であり、その一ユニットであるが、「村」となると、まったく別次元だ。それは「食」を根茎として自立しているがゆえに、国家が滅びても存続しうる生命圏、マイクロコスモスであり、地産地消の有機的な完結性を持った「箱船」でもありうる。

その雛形でもあり、先駆でもあり、そして九十年の老舗でもある本家本元「新しき村」は、短期的な利益産出装置に過ぎない「アメリカ型大規模集約農業」に対して、一つの規範を示して毅然としていなければならないと思う。もし、この農法を導入すれば、十年後その土地は大量の農薬と化学肥料で、ガサガサに荒廃してしまうだろう。そもそも彼らには日本人のように、土を育てたり、土を愛したり、土を敬ったりという感性が、まるでないのである。そして、『THRIVE』で根底から問われていることも、まさにこのテーマなのだ。

■最後は日本の「合気道」シーン

というわけで、再び『THRIVE』に戻る。このドキュメンタリーは、映像による社会啓蒙の書ともいえるが、最後にこの映画は、なんと日本の合気道に触れるのである。（ギャンブルさんは、合気道の黒帯三段）

創始者の植芝盛平の立会いの古色蒼然としたモノクロ動画が、ひとつの理想形として登場する。気の流れのままに相手の攻撃性をやんわりと無化する武術を、新たなモラルとして提示している。これもまた曲線的な渦を巻くエネルギーの流れ、「トーラス」だというのである。打ちひしが

れたい今の日本人にとっては、まんざらでもない心境にさせられる。

ちなみに、かつて植芝の高弟であり、神技と讃えられた塩田剛造は、合気道とは何かと尋ねられた時、「合気道というのはね、自分を殺しに来た相手と、お友達になっちゃうことなんですよ」と、あの落語家の師匠のような、飄々とした口調で答えた。

どうやら、いま外国の屈強なる男たちが、その青い目を輝かせているのは、空手でも柔道でもカンフーでもなく、物理学を超越しているような、合気道の天衣無縫の所作らしい。そういえば、ハリウッドにおいて莫大な収益を稼ぎ出した人気SF映画『スター・ウォーズ』に登場するヨーダとは、こんな老師ではなかっただろうか。私の知っているカリフォルニア出身のアメリカ人も、いい年をしてヨーダの大ファンである。力と戦争と合理主義の彼方にあるべき「理想化された東洋の賢者」「老師」の像は、一貫しているのだ。

こうした巷の風潮からも、従来のごりごりの「力と利益効率の論理」に、欧米市民そのものがうんざりしているのが、手に取るようにわかるのである。

フォスター・ギャンブル氏は、通常ならば巨大企業グループP&G社の総帥として、米政府に圧力をかけていた側かも知れない人物である。なにしろP&Gは、後に囚人に埋め込まれることになる超小型マイクロチップを開発した企業である。しかし彼は、プリンストンの研究室に残り、ゼネラリスト的な社会思想家として、世界の根底にある矛盾を問いつめた。それは結果的には、欧米流の金融資本主義そのものへ、引導を渡す映画を制作することになってしまった。いまのような転形期は、こういった興味深いパラドックスに満ちている。

■目前にあるのは、終末？ ルネッサンス？

二〇一一年は、日本にとってもさんざんな年だった。しかしここに来て、ようやく光が射し込んできたようにも思われる。ひょっとしたらそれは、新たなるルネッサンスとすらいえる規模の世界的潮流かも知れない。なぜなら社会の基盤を担うエネルギー事情に関して、とてつもない可能性が予感されているというのだ。これは『THRIVE』のみならず、複数の情報源においても、同じ事がいわれている。実験のレベルはとうに過ぎ、課題はもはや、社会的な商品化と、受け入れ体制のみなのだ。フリー・エネルギーはすでにSFではない。となると、いずれは東電もエクソン・モービルもいらなくなる。そしてこれは、「新しき村」がすでに実践していることでもある。

確かに主流メディアを見る限り、ここ数年、日本の閣僚は、生気を失ったゾンビめいた顔だけが並び、アメリカの市民もまた、警察官に棍棒で殴られ、催涙ガスを散布されている。まるで自由と民主主義を理念とした建国の父など、一人も存在しなかったかのように。

とはいえ、終末を思わせる夜の海のような暗澹たる視界にも、明け方の光がきらめき、イルカが飛び交い、巨大な鯨が高らかに潮を吹き上げているのが、甲板の双眼鏡からは見えている。問題は、われわれの集合意識がどのような方向性を求めているかを、明確にすることであろう。

一般市民は、いまや酷薄な篡奪型資本主義としかいいようのない多国籍企業のグローバリズムや、金融マフィアによる新たな秩序構築の意志には、ほとほとうんざりしている。いい加減に、見え透いた「戦争経済」を終了したい。これらの背景には、西洋精神史の精髓といえるような知性

が感じられない。古代ギリシャの哲学知も、東洋の叡智も、ゲーテやカントの真善美も、見当たらない。しかし、一世紀以上も続いたニヒリズムの砂漠と、何ら正当性のない戦争の荒涼とした風景を卒業して、二十一世紀を構築するのに必要なのは、これらの一見、古くさいと信じられてきた有益な人類智を、まるごと総合化して再編成したヴィジョンであろう。

ひょっとしたら、いまギリシャ破綻が、EU体制崩壊のきっかけとなっているのは、象徴的なことなのかも知れない。かのソクラテスの霊が二五〇〇年を超えて甦り、全ヨーロッパに対して、「汝自身の無知を知れ」といって、戒めているのではないだろうか。毒杯をあおるのは、今度は支配者の方である。

そして、こういった潮流のパーспекティブで考えてみると、日本においても「白樺派」的な理想が、そして武者小路実篤的理想が、まったくその様相を変えて復活しなければならないかも知れない。さらにいえば「新しき村」も……ということになってくる。

まことに、陰の極まりは、陽に転じる。〈サナダムシ〉も、いまや断末魔だ。あの911以来、いや、父ブッシュによるイラク戦争以来、長らく続いてきた恐怖と隠蔽とプロバガンダによる「鉄の時代」から、いま世界はようやく脱却する支度を、整えつつあるらしい。

(了)

『THRIVE』動画

http://www.thrivemovement.com/the_movie

【訂正】

フォスター・ギャンブル氏は、確かにP & G創業者の家系ではあるものの、現時点で株式の所有は経営には影響を行使できない規模のものであるらしい。したがって、本文で書いたように巨大企業グループの経営者としての将来を約束された「御曹司」呼ばわりは適切ではないようだ。現在のモンサント社などと連動している多国籍企業P & Gとは距離を置いているらしい。のみならず、動物実験に反対運動を起こして一部停止を実現し、P & G社（あのチェイニーが経営陣に名を連ねている）にとっては、やっかいな創業者一族となっているようだ。となると、このドキュメンタリーについて一部で囁かれているグローバル・エリート側からの逆説的な情報操作という説も根拠に乏しく思われる。もちろん『THRIVE』制作にも資金的援助はないとのことである。

「終末」の終わり、「ルネッサンス」の始まり

<http://p.booklog.jp/book/32661>

著者 : Grasshouse

著者プロフィール : <http://p.booklog.jp/users/grasshouse/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/32661>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/32661>

電子書籍プラットフォーム : ブクログのパー (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社 : 株式会社paperboy&co.